

古典を遊び道具に
—パロディー作家の誕生—
細谷敦仁

「今は昔、金取の翁といふ者ありけり。生徒にまじりて金を取りつつ、よろづのことに使ひけり。名をば、〇〇〇〇となむいひける。……」

ある日、生徒から私の携帯電話にこのようなメールが届いた。『竹取物語』のパロディーである。取るに足らぬ内容ではあったが、授業で習った作品を丁寧に読み込み、それを遊び道具にしてしまった生徒の姿をほほえましく思った。

高校に入学してから本格的な学習が始まる古典は、多くの生徒にとってはやっかいな科目のようである。千年も前の文章をなぜ学ばなければならないのか、その意義が見出せず、さらには古典文法を高く険しい壁と感じ、それに手を掛けて登ってみようともせずに挫折する生徒も少なくない。そのような生徒たちと向き合うとき、わたしたち教師はどうやって彼らの古典嫌いの呪縛を和らげる手伝いができるだろうか。

あらゆる古典は、時人にとっては新作であった。それが長い年月の中で多くの人々に読み継がれ、現在に至っている。千年前の作品が突然今に復活したわけではない。その間には、連綿たる古典享受の歴史が横たわっている。生徒を教科書に載る作品と直接向き合わせるだけでなく、その事実の一端を示し、古典作品と彼らの間に一段でも二段でも階段を設けていくことは、彼らを古典享受者の一員とし

て育てていく上で意味のあることと思われる。

をかし、男ありけり。

……さる折しも、白き顔に帯と小袖と赤き、舟の上に遊びて飯を食ふ。渡し守に問へば、「これなん都人」といふを聞きて、

菜飯あらばいざちと食わん都人わが思ふほどは有りや無しやと

と詠めりければ舟こぞりて笑ひにけり。

江戸時代初期に書かれた『伊勢物語』のパロディー作品『仁勢物語』の一節である。「舟こぞりて泣きにけり。」(『高等学校 国語総合』二三〇ページ)の世界を逆手にとっている。『伊勢物語』に精通した作者が、古典の世界で自由に遊んでいる。

このような古典享受のあり方を生徒に見せることで、千年前の文章を前にしてがちがちに固まってしまった彼らの頭を、多少なりともほぐせるのではないだろうか。古典にやわらかに向き合うことができれば、古典を楽しむことはたやすいに違いない。

古典を遊び道具にした現代のパロディー作家は、その後も新作ができるたびにメールを送ってくれた。彼のやわらかい頭をうらやましく思うとともに、若い古典享受者の誕生に立ち会えたことをうれしく思った。

(『高等学校国語総合』編集委員)